



面接の話

医学部を受験する人を中心に、模擬面接をやってもらった人もいるだろう。また、前期試験にはないが、後期試験に面接が課されるという人もいるだろう。そこで、ちょっとだけアドバイス。

模擬面接を受けた人の中では、主として礼儀・作法について指摘を受けた人もいるかも知れない。それは、社会人になっても役立つことなので、謙虚に受け止めよう。ただし、それで合否が決定するわけではないから、それほど神経質にならなくてもよい。礼儀・作法が正しくて受け答えがダメな人と、礼儀・作法は今一つだが受け答えが抜群の人がいたら、後者が合格するのは当たり前である。

例えば、高校生が就職の面接を受けるというなら、正しい礼儀・作法を身につけていたり、ふさわしい言葉遣いに注意したりするのは重要なポイントとなる。というのも、そういうことに高校生としてどれだけ真剣に取り組んだか、つまり、どれだけしっかり準備して面接に臨んでいるのかということが、就職、つまり社会人になることに対する意識の高さ、あるいは熱意の表れとして評価することができるからである。

一方、大学の面接では、そのような観点が大きな比重を占めているとは思われない。なぜなら、そのようなことは、高校生でさえ身につけられるのだから、逆にいえば、いつでも身につけられる性質のものだからである。もちろん基本を押さえておくことは大切だが、後からでは身につけることのできないような、その人独自の「資質」が問われるはずである。

では、どういうところがポイントになるの

か。それは、例えば医学部の場合なら、医師としてのコミュニケーション能力として、どのようなことが求められるのか、ということを考えてみればよい。

医師は直接患者と向き合う。そういう時、どういう医師が患者から信頼され、以後の医療行為を価値あるものへと変えてゆけるだろう？ 当然のことながら、全ての根本に正確な知識が要請される。しかし、受験生である君たちに正確な知識を求めても限界がある。とすれば、その知識の「伝え方」の方が評価の対象になるに違いない。つまり、知っていることを正しく伝えることができるか、分かりやすく伝えることができるか、説得的に伝えることができるのか（自信なげに伝えていたら、相手は不安になる）、さらに、分からないことを誤魔化すのではなく、分からないとキチンと伝えられるか、ただし、分からないと患者に伝えることは、患者との信頼関係を失うことにもなりかねないわけだから、そこをどのような表現をすることでうまく切り抜けるのか、といったことが、大切なポイントになるだろう。

難しい質問をされた時、その答えの正解・不正解にこだわる必要はない。むしろ、正解のない質問をされる場合の方が多いだろう。そういう時、きちんとした理由をもって（つまり論理的に）、今の自分の考えを分かりやすく（つまりコミュニケーション能力を示しながら）答えることを心掛けよう。そして、「合格したい」という前向きな気持ちを持ち続けることが最も大切だ。そういう強い思いは、必ず相手に伝わるものだからである。